結城哀草果著

村里生活記

岩波書店刊行

昭和十年二月十日　第一刷發行
昭和廿四年六月二十日　第二刷發行

村里生活記
定價貳百五拾圓

著者　結城哀草果

東京都千代田區神田一ッ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

東京都新宿區改代町二四番地
印刷者　松浦元

發行所　東京都千代田區神田一ッ橋二ノ三　株式會社　岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號

落丁本・亂丁本はお取替いたします

本製中田・刷印社想理

目次

I

蘭の話……三
出産二つ……六
赤旗を焼く……一四
大晦日の火災……一九
貧られゆく農村の子女……二三
上等兵と希望村……二七

人名のこと……二九
神佛建立……三一
落書の記……三五
多の農家……四一
筵織……四一
紐綯……四二
藁葺事場……四六
冬至……四七
藁打……五三
寶引……五七
村賣……六二
村山半……六八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

炭　焼……七一
農村避姙考……七八
産業組合愚見……八五
山村の旦那……九〇

Ⅱ

山と雪の國……九七
王瀧行……一〇二
初秋の最上川……一〇八
魚住まぬ川……一一四
毒もみ……一一五
兎　汁……一二〇

萱草の花……一二三
蛔……一二九
路標……一三六
秋と身邊……一四二
冬籠雜話……一四六
放尿記……一五〇
スキー場風景……一五四
山小屋日記抄……一五八
雪蟲……一六二
龍山平……一六五
登山精神……一七一

Ⅲ

祝ひ火……一七七
丁髷……一八一
黄金佛……一八四
甥……一八七
犬……一九〇
嫉妬の話……一九六
柳行李……一九九
曼珠沙華……二〇三
托鉢僧の話……二〇七
松葉杖……二〇七

無花果……二〇九
皿……二一一
托鉢……二一四

Ⅳ

齋藤茂吉先生の初印象……二二一
赤彦先生の思出……二二六
門間春雄……二三九
加納曉君……二五一
茂吉先生の父君……二五五
追憶二つ……二六三

色紙一考……二六八
中村憲吉先生……二七三

V

滯京雜筆……二七九
上京いろいろ……二七九
歌會のこと……二八三
四年前の會話……二八四
松葉を食ふ男……二八六
アララギ發行所の朝……二八七
帝國ホテル觀劇のこと……二八八
支那料理……二九〇
「天人」と銀ブラ……二九一

青年醫學士と女店員……二九三
刺身の食ひ方……二九四
雜誌「黑猫」のこと……二九六
震災雜感……二九九
山形……三〇二
卷末記……三〇七
挿畫……平福百穗

试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

I

蘭の話

村の日雇生活者で、蘭を掘りに山にゆく者が多くなつた。それは、國治といふ村の放蕩者の妻のお仲が、蕨採りに行つての歸り山徑に屈んで小便をしてゐると、目の先の熊笹の茂つてゐるなかに、風化した岩がある。その岩の根に珍らしい蘭を見つけた。家に歸つて夫に見せると、これは縞蘭だと言つて、村の植木屋に一圓五十錢で賣つて酒を飲んだ。その蘭を植木屋が、越後から來る蘭商人に六十圓で賣つた。村の人々は目をむき出して植木屋を羨んだ。この話をきいた權六といふ男は握飯を背負つて、未明に山に出掛け、夜になつて歸つた。そして五十幾日目でやうやく可也の蘭を掘り當て、二十五圓で賣つた。權六は男を勤め、恩給がついて歸國してから、村役場の書記をやつてゐたが、ひそか

に村長の椅子を狙つて策動してゐることが知れて、役場を追出されて失業した五十四歳の男である。

隣家に樵夫を渡世にしてゐる善吉といふ老爺がをる。爺は雪が黒く汚れて殘つてゐる杉山で働いてゐたが、晝食のとき雜木が白く芽ぶいてゐる日向に出て行つた。そして冬の間雪に壓された笹が縱横に亂れてゐるところに、半笹の枯葉を冠つてゐる、十七本ほどの大株の銀覆輪の蘭を見出した。爺はその蘭を七十圓で賣つたために、樵夫の業を止めて、蘭掘りを爲事にするやうになつた。

小學校教員安達達雄は今年二十三歳の青年である。四十三圓の月給で五人の家族を扶養するのに骨が折れた。去年死んだ父は巡査であつたが、酒豪で卒中で倒れてたちまち死んだ。その父は愛蘭家であつたので六五鉢の蘭が今も殘つてゐる。そのなかに白い虎斑の蘭の一鉢があつた。父はこの白虎は遺傳の確實なものであつて、天下の珍品だといつて、自慢してをつたのを達雄も聞かされてゐたので、父の死後、幾人かの植木屋が來て、しきり

に賣ることを勸めたが應じなかつた。その後十八歳になる妹が看護婦になつて身を立てることになり、その試驗準備等で金が若干入用になつて、つひに達雄は父遺愛の白虎の蘭を手放すことに決心した。植木屋は初め二圓に値をつけたが達雄が首を振るので、十八圓で手を打つた。その蘭が幾人かの手を渡つて、千圓以上に出世してゐるといふことである。

山形・宮城の縣境に金山峠がある。ご維新までは、津輕や秋田の大名の行列が往反した峠であるが、今は繭や魚を積んだトラックがたまたま通る他は、旅人の姿を見ることがめつたになくなつた。この峠に金山銅山がある。この銅山の坑内に湧く水を排水するポンプは電力によつて動いてゐる。このポンプ係りの工夫が、電力の供給を忘れて、裏山に縞蘭をさがしてゐるうちに、水が坑内に据付けてあるポンプの上に三四丈も溜つて、つひに坑内は水攻の難に襲はれ、休坑のやむなきに到つたのであつた。つまり縞蘭が大きな不幸を招いだわけである。

（昭和八年十月　鐵塔）

出産二つ

一

を催して、午後六時半頃一午前六時一日は、午前六時ころから陣痛を催して、午後六時半頃のお光、長女のてるよがわの相借家つかげの相借家のお豐、産婆のお光、長女のてるよがとにも來てくれる四十歳内職にして〆結を内職にしてゐて、なにごとにも來てくれる四十歳かげてから一ケ月とたたの二階に開腐屋の二階に開業の看板をかかげてから一ケ月とたたよは母親に似て、五歳にを位の娘〆若すぎる位の娘である。てるよは母親に似て、五歳に寸の肥つた大女で、三十匡婦のおとだ。産婦のおとわは、五尺三寸の肥つた大女で、三十

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong